

講義⑥

「見えない人の見る世界」

講師：東京工業大学准教授 伊藤 亜紗

1 障害から身体について考える

視覚障害、ろう、二分脊椎症など、障害を持つ人々は健常者の感じている世界とは違う世界を持っている。そうした人々から直接話を聞くことをもとに研究を行っている。「福祉論」ではなく「身体論」からのアプローチ、つまり、障害者を健常者と同じにするのではなく、差異があることに注目している。たとえば、四本足の椅子に比べて三本足で立っている椅子はどんな感覚か、ということに視点を向けた研究である。

2 見えない人にとっての読書とは

同じ環境・情報があっても、受け取る身体が変われば意味も変わる。

「店のドアを開けると、カウンターのほかに5つのテーブルが並んでいた。」という文章を例に考えてみる。

見える人がこの文章を読んだとき、こぢんまりとして落ち着いた雰囲気のある店を自然にイメージする人が多いだろう。しかし、見えない人が同じ文章を読むと、内容より描写の細かさが気になってしまう。テーブルがいくつある、という情報は普段気にしないことであり、店の規模は音の反響や他の客などの会話の様子から把握しているためである。

また、見える人は店に入るとまず席を探すためテーブルに注目するが、見えない人は自分で席を探すのではなく連れて行ってもらおう。こうした経験の仕方の違いが、文章から得る意味の違いにつながっている。さらに見えない人には、椅子の数などの数値的情報はあっても、材質や座り心地、形状などの触覚的情報や匂いなどの情報が描写されないことも気になるという。

このように、目の見えない人にとって読書は、見える人の見かたを学ぶ機会であり、その見かたへの違和感に気付く機会でもある。

3 本を読むことの可能性

読書を通じて見える人、見えない人の違いが浮かび上がることがわかり、両者が「ともに読む」ことによる発見があるのではないかと考えた。美術鑑賞においてはすでに、「ソーシャルビュー」という事例がある。作品に描かれているものを見えない人に伝える作業を通して、見ることを相対化する取組である。

同様のことが読書においてもできないか、ということで、H.G ウェルズ著『盲人国』に見える人・見えない人でともに読むという取組を行うと、一番多く挙げたのが「盲人国の描写が甘い」という意見であった。そこで、「見えない人の国とはどういうものか」を考えるワークショップ「視覚のない国をデザインしよう」を行い、見える人見えない人双方の意見、アイデアが交換され、大変意義深いワークショップとなった。

このように、本を読むことの可能性を活かした取組を今後も進めていきたい。



▲講義⑥